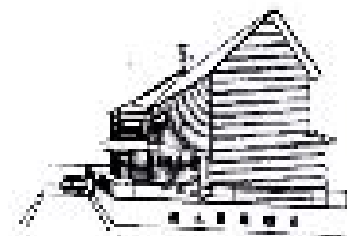


<今朝の聖書から> 聖書、特に福音書の中には、奇跡物語が沢山記録されています。“聖書は大いに信じるけれども奇跡やしるしは信じない”と言って、聖書から奇跡物語を取り除いてしまったら、福音書の半分以上を無視してしまうことになるでしょう。そして奇跡は福音と関係して語られていることに注意しましょう。皆をびっくりさせるために奇跡は行われたのではなく、人々の救いのためになされているのです。都合のよい奇跡だけを信じる資格はありません。“復活がなければ空しいので、これだけを、選んで信じる”ということの意味がないのです。そして私たちが“どんなことが起こったのだろう”と考えるほど、一番基本的な信仰において、主の業を信じているのです。今朝の箇所も、新約聖書に何回か記録されている、盲人の癒しの物語です。“弟子たちはイエスに尋ねて言った、「だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか」。イエスは答えられた、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである(9:2~3)”という対話にまず注目しましょう。この盲人は、見えるという体験もないまま、ただ毎日過ごしていたことでしょうか。不運や不幸には原因があるはず、信仰深い弟子たちも考えた結果が、罪と神の裁きということでした。このような事に対しては何が原因なんだろうと思う社会に、今も住んでいます。家族に居るのは恥ずかしいことと思ったりします。わからない時には“難病”などという言葉も使います。8節以降には、近所の人々の理解も示されています。まるで、“おまえは見えるようになってはいけない”と言っているかのように、追求し始めます。“あの乞食じゃないんじゃないか?”などと話が進められますが、当の本人は、平然と“私です(9節)”と言っています。次に人々は宗教的な権威者パリサイ人のところにまでこの話を持ち込みます(13節)。更に、この日が安息日であったことまで、恐らくはパリサイ人の信仰の内では、問題にされたことが分かります。安息日に、癒し(治療)がなされたことまで、許せなかったようです。さて主の栄光を現したのは誰でしょう。力を尽くして原因究明に走った人々には何の益ももたらさませんでした。先週も学びましたが、周りの人々に主の栄光の現れたことを喜ぶのではなく、何の恵にもつながらない“裁き”に、多くの力を費やし、不満の中に生きるのではなく、“主が救われたのです”と毎週、信仰告白する教会であることを思い出しましょう。

週報

2009年 6月 14日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト
清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26
☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp